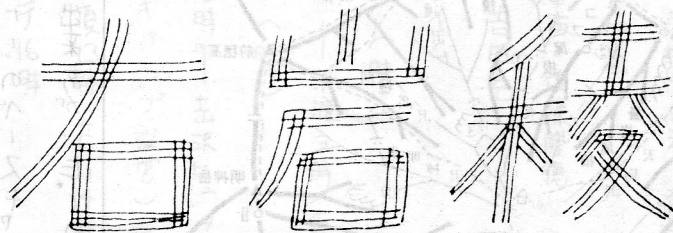


夏山登山学校  
前穂高岳東壁



毛利哲也

・メンバー 後藤隆徳(39) 毛利哲也(53)

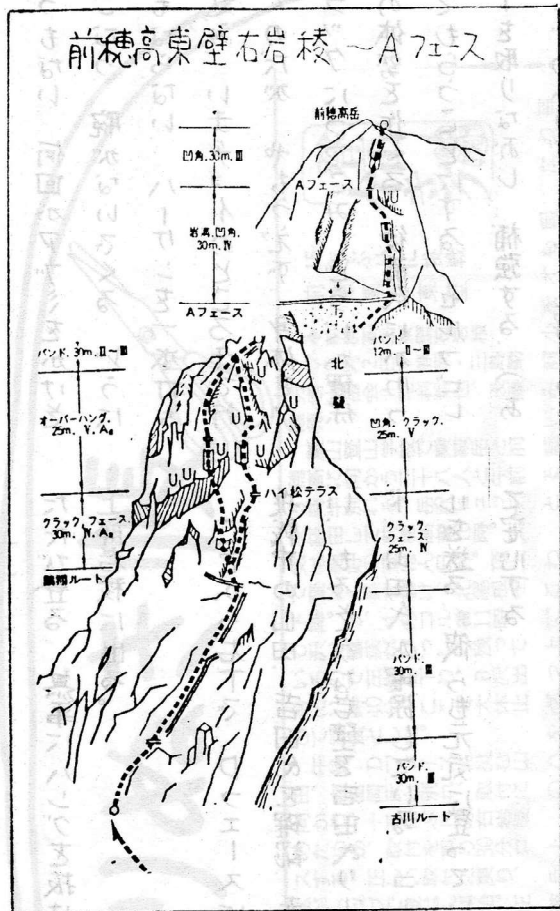
・コースタイム 上高地5:30 岳沢ヒュッテ(朝食)7:20~40 前穂高岳10。北尾根3:4のコレい  
 ○B沢出合11:40 昼食12。取付を誤りミ分ロス 正しい取付には。上部岩稜14。前穂高岳頂上15:45 山田 吉田氏着17。岳沢ヒュッテ18:20

夏山登山学校で岩壁登はん隊が編成された。前穂東壁右岩稜とDフェースである。右岩稜には後藤毛利 Dフェースには山田 吉田が挑戦することになった。

上高地で登はん隊は一足早く出

発する 岳沢ヒュッテで朝食 前穂へ向う 天気は絶好の登はん日和である 前穂頂上10時 登はん具着装 北尾根を下降する 峰の下りを心配したが 思ったほどでなく 全員スムーズに下降する 下降中であつた 若いクライマーが我々が上高地から来た」といふと驚いていた(時間的にかなりハードである)

る。4のコレからC沢は雪渓がびっしり残っている。ここでの降の方がいやらしい。左岸をまきようにして下る。さすが後藤氏はハンマを使って上手に下る。B沢の出合で大休止。昼食。雪渓の水が冷たくて うまい。



いよいよこれから本番である  
Dフェースに挑む山田 吉田氏  
とここで別れる 彼らは右え 我  
らは左え 頂上での無事の再会を  
約して

後藤氏は15年ぶりの右岩稜であ  
る。そのためでもないだろうが

取付を誤やまる すこし手前で取  
付いてしまった 私がいかにほど  
登って手こずっている。後藤氏  
が「最初のピッチは、そんなに舌  
をかしくはないはず」ということで  
取付が誤ちがっていたことに気  
づく。30分のロスタイム。

正しい取付戻に戻る 後藤氏ト  
ップで登はん開始 眼下に架又白  
徳次園が見え ニパーテが沢を  
つめている やさしいバンドを斜  
上 2ピッチ目も同じようなバン  
ドを登り ピナクルテラスに着く  
るピッチ目はいよいよ核心部40  
メートル登はん 高度感もぐんと増し  
快適に登る オバーハンクの下  
で 後藤氏に迎えてもらう ルー  
トはここから小さなハンクに向か  
う 以前に比べると岩の崩壊が進  
み 出っぴりが小さくなっている  
このことである

ここから私がリードする 教員  
は登って ハングで手こずる 石  
側にまわりこんでみたが いけを

うもない。何回かアブミをかけとこなう。腕がなびてくる。どうにもならない。ハーケンを一本打ち込み。いまナヨイのところまで行くのだが。やもうえず。身体をク

ラックにつっこみ。どうにか確保の体勢を作る。後藤氏にかわつてもらふことにする。セルフビレ

ーを取りなおし。補強する。(あとでわかるが。これは正解であった。)

私の確保で後藤氏が登る。ハン

たたび登る。無事にハングを抜け上部岩稜に出る。

ここから右下で。Dフェースに挑戦中の山田。吉田氏を確認。赤い。もうそうな岩壁を吉田氏リード。山田氏が確保している。コー

ルを送る。彼らも元気に登っている。安心する。

大テラスに着き。Aフェースを2ピッチに登り。15時4分。前穂高

岳頂上に着いた。頂上には。誰もいない。天気もよく。気持ちがいい。そう快である。

Dフェース隊がくるまで後藤氏は気持ちよさそうに昼寝をたのし

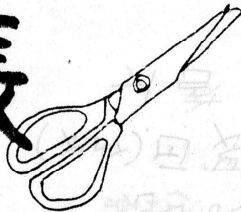
んでいる。30分ほどたつてもまだこない。なんとなく心配になる。コールをかける。「ローサン。ヨシダ」。返事がない。彼らは必死で登っていたので。返事どころではないとのことだった。

17時。山田。吉田氏が無事到着。おたがいの健闘をたたえあう。頂上ヒバークの予定を変え。頂上から一気に岳沢ヒュッテめざしてかけ下る。

みんなと合流できて。楽しさも倍化。さらに楽しい山のパーティー。で夜もふける。

翌日。登山隊四名は。早やばと岳沢をあとに中の湯に向う。

# きりぬき帳



## 登山きりぬき帳

### 15年ぶりに挑戦 前穂高の東壁

◆前穂高岳東壁右岩稜

▽8月2日▽静岡・三島勤  
労者山岳会||毛利哲也、後藤  
隆徳

夏山登山学校で乗鞍岳と前穂高に向かう三十八人と午前5時半別れる。岳沢ヒュッテを經由して前穂高着10時。天気は絶好の登はん日和。頂上で登はん具を著け、北尾根を下降。3、4のゴル着11時。

C沢は雪渓がびっしり残っている。左岸を下り、B沢出合に11時40分。ここで大休止して昼食とした。

午後、Dフェースに挑む山田、吉田両氏と別れ、取付に向かう。十五年ぶりの右岩稜のためか、取付を誤り30分ロスする。正しい取付に戻り、私がトップで登はん開始。正午、ゆきしいバンドを斜上し、毛利氏も続く。3ピッチ

目も同じようなバンドを登り、ピナクルテラスに到着した。

3ピッチ目、いよいよ核心部の四十以登はんだ。高度感もぐんと増し、快適に登る。オーバーハンクの下で毛利氏を迎える。ルートはここから小さなハンクに向かうが、以前に比べると岩の崩壊が進み、出っぱりが小さくなっている。そのためこのルートの魅力を半減させてしまっている。十五年前のハンクはもっと大きくて立派だった。

しかし、毛利氏の体調が思わしくなく、このハンクで手をこまねた。そこで私が確保してもらい先行する。ハンクの上でハーゲンになげなく乗ったらスポーンと抜け、ハンク下まで落ちてしまった。気をとり直してふたたび登り、ハンクを抜け、ようやく上部の岩稜に出た。

途中で別かれここでDフェースに挑戦中の山田、吉田両氏を確認し、コールを送る。彼らも元気に登っていて安心した。大テラスに着き、Aフェースを2ピッチ登り、15時45分前穂頂上に着いた。Dフェース隊がくるまで一時間ほど昼寝。とても気持ちよかった。

17時 Dフェース隊と合流して、みんなのいる岳沢ヒュッテに向かった。52歳の毛利氏もよく頑張った。



前穂山頂で毛利氏(左)と筆者

(後藤隆徳)